

写真週刊誌 ～人の欲求を閉じ込めた社会の縮図～

岡井 ※※※
※※※ OKAI

中京大学現代社会学部現代社会学科
学籍番号 C11****

第1章…はじめに

皆さんは待ち合わせなどで時間を潰す時に皆さんはどのようにして時間を過ごしているだろうか。SNSサイトで友人の書き込みを見たり、メールを送信したりしてたわいもない話をしてい
るのだと思う。人々は本人が気付かないだけで暇があればあらゆる手段を用いて情報を入手しよ
うとしていて、意外に多くの時間を費やしているのである。しかも時間を費やして得た情報は
大抵他人のことなのである。そして情報を得たいと思う欲求はかなり強く人々を駆り立ててい
ることが分かる。私は週刊誌が好きでコンビニに買い物で立ち寄ったり、待ち合わせなどで時間を潰
したりする時には週刊誌を立ち読みしている。週刊誌の表紙には大きな文字の見出しで人の興味
をそそり、ついつい手にとらせてしまう不思議な魔力があるからだ。さらに一回手に取ってしま
えば興味深い写真や記事の内容で読者をのめりこませてしまう。前述したように人間は他人のこ
とが気になってしかたがない生き物なのであるからして、週刊誌は実際自分たちが普段している
噂話を規模を大きくしているだけのことのようにも思える。しかし、その裏には巧妙に練られた
構成と話題で私たちの「知りたい」という本性から興味を引き出しているのである。そんな週刊
誌について私と同世代の人たちはあまり週刊誌（週刊の漫画雑誌を除く）を読んではいないよう
に思えたので少しでも魅力を感じてもらいたと思う。

第2章…週刊誌の定義と分類

週刊誌とは？

1887年3月、日本初となる週刊誌・团团珍聞（まるまるちんぶん）が創刊された。1922年、
朝日新聞社から「旬刊朝日」毎日新聞社から「サンデー毎日」が創刊され、今日の週刊誌のさき
がけとなった。1956年、出版社として初めて新潮社が「週刊新潮」を創刊し、他の大手出版社
も週刊誌を創刊した。

出版社系週刊誌の記事を執筆する記者は出版社の正社員ではないフリーライターやフリージャー
ーナリストである。フリーライターの無記名記事による週刊誌報道を確立したのは「週刊文春」
である。正社員でない契約記者、委託記者、新聞記者のアルバイト原稿などの無記名記事や匿名
証言が多いため、「記事の信憑性が低い」「責任の所在が曖昧」と非難され、「センセーショナ
リズム」「スキャンダルリズム」「覗き見趣味」「いい加減な情報」とネガティブイメージが払拭
しきれない。

ここからは週刊誌の細かな分類と特徴について説明する。

① 総合週刊誌

一言に週刊誌というと「週刊新潮」や「週刊現代」などの報道・ジャーナリズムを記事の主体
とする総合週刊誌を指すことが多い。総合週刊誌の多くはB5版かA4版の大きさで、グラビア

ページと文章記事ページでこうせいされている。内容は政治・経済・芸能・スポーツ・社会事件、ルポルタージュが中心である。



② 女性週刊誌

女性を主な購読層に想定した週刊誌の総称である。代表的な女性週刊誌は「週刊女性」、「女性自身」、「女性セブン」というように日本国内には三誌あるが、実は女性週刊誌は日本国外に例がなく日本独自に発展した週刊誌なのである。記事の特徴としては主婦層が関心を持ちやすいと考えられている内容で誌面が構成されており、テレビ番組のワイドショーとテーマが重なることも多い。各界で活躍する人物の裏の顔と複雑な人間関係を暴くといったゴシップ記事も頻繁に取り上げられる。そのため記事の主な内容としては芸能人の交際・結婚・離別といったいわゆる熱愛・破局報道を中心とした芸能ニュース。皇族の動静・入学・卒業などが多く、身近な話題に終始しているが、皇太子を始めとした男性皇族はほとんど取り上げられない。あとは料理・美容・恋愛に重きを置いた占い・通俗心理学で記事は構成されている。



③…写真週刊誌

雑誌の記事のほとんどが写真を中心に構成したスタイルの週刊誌。現在創刊されているのは「FLASH」「FRIDAY」の2誌のみ。



第3章…写真週刊誌の記事の過激化

芸能誌や娯楽誌を中心に発行している出版社が出し始めた発刊当初の写真週刊誌は、社会風俗や芸能関係を取り上げる芸能誌や娯楽誌の延長としての傾向があり、特に記事がつかないような「芸能人の日常」や、報道関係では事件・事故・社会現象の写真が記載されていた。休日の芸能人の素の姿や、本来なら表に出ないマスメディア作品制作の裏側といったものや、大きな社会問題として話題となった事件・事故の現場や、その発生当時の写真を取り上げる一方で、カルガモ騒動などのような動物関係の微笑ましい話題や、世相に絡む社会事象も取り上げるなど、幅広い内容を掲載していた。スター芸能人に対して大衆が抱く健全な興味の延長として、あるいは活字離れが進んだ若者世代にも判りやすい内容の雑誌として受け入れられ、発行部数を急速に伸ばしていった。しかし「報道の自由」を理由に芸能事務所と連絡し合うなど、一応の報道倫理に則った形で運営されていたこれらの写真週刊誌だが、しだいに盗撮まがいの「お宝写真」と称するものや、交際関係などプライバシーに関わる写真がしばしば掲載され、芸能人自身、事務所側も写真掲載を拒絶するような事件が続発している。出版社内、編集部内ではとにかく雑誌がより多く売れるスクープを掲載することが高評価に繋がったため、以下のような思い込みが業界全体に蔓延し、暴走状態に発展していく。

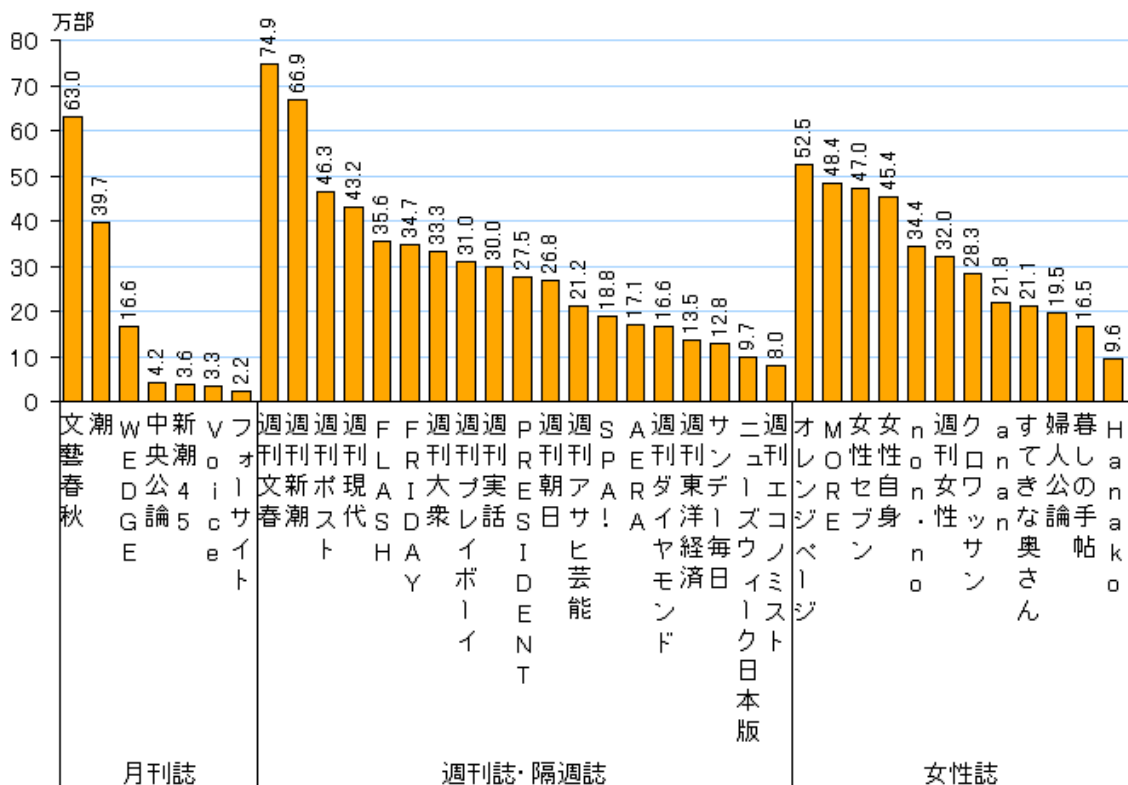
- ① 報道の自由は憲法で保証されている権利で、社会の公器としての報道のためには多少の免脱行為は許されるべきである。
- ② 芸能人・著名人、重大事件・事故の関係者や被害者は社会の注目を大きく集める「公人」であって、社会の公器たる報道として真実を明らかにする以上、「公人」のプライバシーは制限されてもよい。

このような思い込みの結果、まだ捜査途中で検分の終わっていない事件現場に無許可で踏み込んで証拠品を荒らしたり、被害者の心情や人権を全く配慮せず逆に踏みこむような報道合戦を過熱させたり、あるいはでっち上げや捏造記事を掲載する、また現在でいうストーリーまがいの「一発屋」が出てくるようになった。そうしてくると写真週刊誌関係者の意識は、競合誌との発行差を意識するあまりに社会規範を軽視する風潮が甚だしく、「事件事故の写真は遺体が写っていてこそ価値がある」や、「芸能人は致命的スキャンダルを晒されてこそ価値がある」とより発行部数を増大させるための話題作りに工夫を凝らした誌面作りの追及を至上とし、挙句には「芸能人にスキャンダルを起こさせてナンボ」という、とにかく発行部数が稼げる誌面が作れるならば、手段は厭わないという風潮まで見られるようになっていた。これに乗じて、人気芸能人や若手の注目株と目されている俳優やスポーツ選手との間で男女の肉体関係などのスキャンダルの構図を作り出し、写真週刊誌、ついでテレビのワイドショーに計画的に情報を流させて話題として盛り上げさせることで、自身の売名のために利用しようとする三流の芸能タレントやグラビアアイドル、アダルトビデオ女優までもが続々と出現するようになった。ある意味では編集者、カメラマン、ライターすべてのモラルが崩壊した中で、「報道の自由」という言葉の独り歩きと暴走が平然と

かつ公然と行われたわけであるが、「有名人にプライベートは存在しない」「報道のためなら人権すら無視する」「有名人の職業生命を脅かしてでも部数を稼ぐ」というこれらの姿勢は、やがて数々の破綻と問題を招いてきた。

また、1990年代以降、メディアミックスと呼ばれる複数の宣伝媒体を用いることによって、他の宣伝媒体の弱点を相互的に補う展開が、出版業界の収益確保にとって避けられない要素になったことから、これに欠かせない俳優や芸能事務所との関係の構築・強化が出版社にとっても重要かつ急務のものとなった。そのため出版社・編集部は、記事に反発して上述したような上述したような形で関係断絶を明に暗にちらつかせる芸能人・事務所に対し、自社他誌へ掲載の見返りとして写真週刊誌の記事の部分・全面差し止めを受け入れることも増えてきた。部分差し止めには明らかにスキャンダラスな内容の写真に対してもキャプション記事では批判的・悪意ある表現を極力控えることも増えてきた。また撮影に成功していれば、全盛期の編集方針ではまず間違いなく掲載していたであろう、芸能人のイメージを落とすようなスクープ写真についても、掲載について意図的に手加減した、あるいは見送ったのではないかとされるケースも増えてきた。この場合芸能事務所は刑事裁判や民事裁判に訴えずとも出版社に対して「貸し借り」の関係を作ることのできるため、メディアミックス展開にプラスに働く効果も出てきた。しかし、当初はスクープとなる写真を掲載して部数激増の原動力としてきたのに、このように商業的な都合で下手に出てしまう創刊当初とは矛盾した編集方針と、取材方法と記事内容が社会問題となり、一般大衆からの厳しい批判もあったために発行部数を落としていった。

一般雑誌発行部数ランキング



(注)対象雑誌の選定は社会実情データ図録による。部数算定期間-2008年10月1日~2009年9月30日。
(資料)社団法人日本雑誌協会HP(マガジンデータ2009年版)

2000年代に入ってからでは売名目的のアダルトビデオ女優や二流三流の芸能人などと手を組み、著名芸能人やお笑い芸人を「ハメて」写真を撮って記事に仕立て、スキャンダルとして芸能人を貶めるといった、芸能人のスキャンダルを写真週刊誌を取り巻く者たちが自ら作り出して記事にしている状況は、現在もなお幾度となく繰り返されており、手法も巧妙化している。

全盛期の写真週刊誌は日本のマスコミの記事作成手法に大きな影響を与えた。写真週刊誌チームが引き起こしたマスコミのイエロージャーナリズム化の後遺症は現在に至るまで深刻である。現在も写真週刊誌のみならず、テレビ局の「情報番組」のスタッフまでもが視聴率とスクープ目当てに非常識な取材を繰り返して問題化することは日常茶飯事となっている。一部には注目を集めるアマチュアのスポーツ選手などに対する盗撮未遂騒動などを起こした者も存在する。取材者サイドでは問題行動が表面化するたびに謝罪こそしてはいるが、「どんな非常識な取材でも、問題化したら謝罪をすれば許されると勘違いしているのではないか」と、他のマスコミからも批判を受けるような有様である。また、記事に対する批判が起きたり批判が予想されたりする場合に、「報道の自由」や「報道の意義」という言葉を振りかざしてやたらに自己の正当化を図り、自誌を売るだけ打って後は批判や議論に目を背けて通ろうとする無責任な部数確保と売り逃げの姿勢も相変わらず見られる。

このような写真週刊誌を筆頭とするゴシップマスコミの破廉恥な姿勢や報道と取材攻勢は、アマチュアスポーツや事件・事故の関係者がマスコミ全体に対する不信感を抱く原因となることもあり、写真週刊誌以外のマスコミが時間や手間を掛けて関係者との信頼関係を構築し進めてきた取材までもが困難になるケースも多々見られている。大手出版社各社が覇を競った1980年代の業界全盛期と比べれば、あまりにもあざとい内容のものは見られなくなったとはいえ、写真週刊誌も含むゴシップマスコミの倫理規範意識は相変わらず低い。

また、マスメディア界にある職場独特の雰囲気も問題である。各務英明氏によれば、やらせやでっち上げのような記事が書かれる背後には記者として評価されたい、報道人として成功したい、そのためには同僚記者にも他者の記者にも負けたくないという競争心理や功名心が強く働いているし、それがさらに、自分は負けそうだ、失敗しそうだ、評価を落としそうだという焦りを生んでいく場合が大いにある。

こういう記者心理、報道人心理を作り出す独特のムードというか状況というかそういうものがたしかにマスメディア界には確かにある。しかも、そうした状況を生み出しているものの1つが、この世界で特に際立つ、能力主義であり結果主義であることは間違いないだろう。その裏側には自分たちがある種の「選ばれたものたち」というエリート意識のようなものさえ潜んでいる。

能力主義とは、いうまでもなく実力主義であり、要領主義でもある。誰よりも早く情報源に接近し、巧みに取材し、素早くうまく原稿を書き、写真や映像を撮り、送稿し、上司であるデスクにその記事や映像を売り込み、できるだけセンセーショナルに扱ってもらおう。こうした日々の勤務現場の日常の評価が、記者のその後の昇進、昇格にもつながっていくわけで、当人にとってはその仕組み自体が良いとか悪いとか言っている余裕もなく、ただ真剣に仕事にまい進するしかないのである。

第4章…報道の自由

この章では週刊誌の記事の過激化を正当化する場合に取り上げられることの多い、報道の自由とは何かについて説明する。

報道の自由とは基本的人権の一つであり、現代の民主主義には必須の存在である。主に国民から国家に対する権利であり、権力の暴走を監視するために欠かせない役割である。マスコミによる報道が、三権分立に対する第四の権力といわれるゆえんである。また、報道機関の活動は国民の日本国憲法第21条の「知る権利」を充足させるのに重要な役割を果たすことから、報道機関には、報道の自由が認められている。報道の自由及び取材の自由は、報道機関にのみ与えられた特権である。

しかしあらゆる権力と同じく、いや、報道という職業柄特別に与えられた権利であるかため特に濫用してはならないものである。

だが、過去にはマスコミ側が報道の自由を濫用したために起こった「フライデー襲撃事件」という芸能人による編集部への暴力事件がある。内容は、「フライデー」の契約記者がビートたけしと密接交際をしていた専門学校生の女性を学校の正門付近で待ち伏せし、たけしとの関係を聞こうとしたが、女性が避けて立ち去ろうとしたため、記者が女性の手を掴んで引っ張るなど乱暴な行為に及んだ。そのことに怒ったたけしは、フライデーの発行元である講談社に電話をかけて、強引な取材に講義したうえ「今から行ってやろうか」と通告し、たけしと弟子集団（たけし

軍団)の計11名で講談社の編集部には押しかけ、たけしが「担当者をだせ」と迫った後、どちらからともなく一斉にもみ合いになった。そして、たけしが現場にあった傘や消火器を用いて編集長及び編集部員らに暴行を働き、住居侵入、器物破損、暴行の容疑で現行犯逮捕された。事件後、たけしらは逃亡の恐れなしとして釈放される。当初はたけしよりもフライデー側に非があるとの意見が大勢を占めていた。しかし、新聞系メディアがテレビも問題当事者であるとして取りあげたこと、さらにたけしの出演番組のテロップ付きでの放送、たけしの一部の番組収録への参加などにより批判の論調が強くなっていく。これを受けたたけしの所属事務所は「謹慎」の名目で、たけし及び軍団メンバーは半年間芸能活動の自粛を発表した。

さらに、このフライデー襲撃事件自体が人気絶頂の芸能人が集団で暴行に及び、逮捕されるという前代未聞の事件だったということもあり、各種マスコミに取り上げられることになった。また、スポーツ紙は連日のように事件を事細かに報道し、売り上げを大幅に伸ばした。「強引な取材は行き過ぎ」というたけしへの同情論、「いかなる事情があっても暴力はいけない」、「人気芸能人が青少年や社会に与える影響は大きい」という意見など、様々な意見が巻き起こった。後にフライデーの巻末には「プライバシーや人権問題については、慎重に取り扱い、一般市民の私生活はこれまでにまして配慮」「今後も暴力に対しては、断固たる態度」との内容の社告を掲載している。

第5章…知ることへの欲求

報道は消費者が情報を買って取ってくれるから成り立っている商売である。ではなぜ、人はお金を出してでも週刊誌が扱っている噂やゴシップを知ろうとするのだろうか。それには人間の本質的な二つの特徴が関係している。

第一の特徴は、人間が他者と関わり合って生きる社会的な存在だからである。人は誰かと遭遇すると、とりわけ「私たち」という感覚を持つ。たとえ付き合いが苦手で孤独な人間であっても例外にはならない。たいていの生きものと同じように、人間も相互に交流するようになっている。私たちはともに話し、ともに食べ、ともに働く。取引し、交換し、議論する。人間であることは、誰かとコミュニケーションをとることである。

第二の特徴は、人間には世界を理解したいという根源的な欲求があるからだ。太古の昔から男も女も理性を与えられてきていて、つまり知覚し、認識し、考え、判断し、信じ、選択する能力を備えた存在として捉えられてきた。言い換えれば、私たちは理解する存在なのである。そして理解するとは、知覚したものに意味や前後関係を与えることで、ものごとについていっそうの重要性を持たせ、全体として筋の通ったものにするということだ。理解するとは、人間の体験を正しい方向へと導き、今後の成り行きまでも予測することだ。理解する能力がなければ、情報が錯綜し、入り乱れているだけに違いない。世界を理解するという試みは、人間にとって実に理にかなった体験なのである。

つまり、私たちは本質的に社会的な存在であり、世界を理解したいという抗いがたい衝動を抱え込んでいる。ひとりひとりの考えを合わせれば、ものごとを共同で理解することが可能だ。私たちは協力し合って人生を理解する存在なのである。だとするならば、噂とは人間が世界を共同で理解しようとする本質的な行為であり、噂とは実際、そのための優れた方法なのではないだろうか。

その中でも写真週刊誌が報じるものにゴシップというものがある。ゴシップとは、巷で伝聞される興味本位の噂話のことを指すが、特にマスメディアにおいては芸能人などのゴシップを、「不祥事」・「醜聞」を意味する「スキヤンダル」という表現で伝える事が多い。そのため、私が購入した写真週刊誌の表紙にどのような見出しで読者の購入意欲をそそっているのか挙げてみる。

フライデー 2月17号

大塚麻恵「決意のグラビア引退ヌード」

アダム徳永「究極の相互愛撫SEX」マニユアル

AKB48「ロックンガール」潜入撮

浅野忠信♡ 仲里依紗白昼堂々「抱擁&キス!の大阪デート」一部始終 仕事の合間を縫って男の元へ女優は駆けつけた。年の差16歳。薬指に光るペアリングが真剣愛の証である。

赤西仁♡ 黒木メイサが「恐怖のホテルに行く前」

きゃりーぱみゅぱみゅ「10代最後の誕生日」

再び小豆島で密着 テレビ局の「経費全部持ちます」で始まった奄美大島移住 ビッグダディの「真実」第2弾

富士山異変、そして東京直下型地震のカウントダウンが始まった

どうやって逃げる、どこへ逃げる 東京「震災マップ」で我が身を守る 第1回渋谷・世田谷・目黒・品川・大田区編

50代でも30代に見える健康法

第7弾 地方公務員の「休暇制度」に怒れ!

被災地からアスベスト瓦礫がリサイクルされている

フライデー 2月24日号

牧瀬みさ「TBSでAV宣言した18歳美少女」

嘉門洋子「感じすぎるカラダ」

ネットで大騒ぎになっている「密愛のサイン」は、これだ! 福山雅治♡ 吹石一恵「同じ帽子!」と「大吉くん」

ビッグダディの「真実」第3弾「ドン底教育論」

慰謝料6億円! 西岡が語る「モデル妻との離婚戦争」

上地雄輔「紳助“父ちゃん”がいた店でご機嫌な夜」

直下型地震を生き抜く「サバイバルQ&A20」

ケンタロウ「首都高から6m落下!」衝撃現場

プロゴルファー池田勇太「美女と沖縄4泊5日の熱愛」

フライデー 3月2日号

これで見納め! 仲村みう「新撮ヌード」

濱田のり子「禁断の剃毛ヌード」

SKE48鮮烈水着ショット先行公開!

乃木坂46生駒里奈ソロ初特写!

スクープ撮! きゃりーぱみゅぱみゅ「イケパラ俳優」と半同棲!

ビッグダディ第4弾「肉食恋愛論」

中国・韓国家電「買うなら、これだ!」

本誌が目撃 黒木メイサ「肉食豊満女優の歩み」

大調査「有名人たちの意外な同級生」

『オセロ』中島 本誌が撮った秘蔵写真! 「洗脳&激太りからの“生還、作戦」

フライデー 3月9日号

尾崎豊「創作ノート秘話」

スクープ撮り下ろし 完熟クイーン壇蜜「衝撃ヌード」

袋とじ アダム徳永の「早漏克服SEXマニュアル」

AKB48渡辺麻友「ドキドキのソロ特写!」

SKE48松井玲奈「入浴ショット!」

スクープ撮! 眞鍋かをり「吉井和哉とバラ色の同棲生活」満喫中

木嶋佳苗被告「驚愕の赤裸々セックス法廷」一部始終
光市母子殺人事件 死刑確定となった「元少年・福田孝行」
直撃！ ナイナイ岡村が語る「『オセロ』中島&霊能者との会合」
有名人たちの「奇行と洗脳」衝撃事件簿

フラッシュ 2月21日号

独占 岡田潤音Jカップ全裸

NMB48山本彩&渡辺美優紀

必見！27歳SEXYボディ石川梨華

“幻想”の官能撮り下ろし 吉木りさ

緊急徹底シミュレーションXデーは2015年説が濃厚！ 富士山噴火で首都圏に「160ミリの灰」が積もる！

八百長引退 元霧の若激白！「調査委から浴びせられた“屈辱的”な言葉

歴代天皇125代ほぼ完全名鑑

密着&インタビュー長澤まさみ

妖艶！花魁ランジェリー倅田來未

やしきたかじん「やばい写真」四国ルートを追う！

人気K-POP美女歴史的放送事故の顛末 韓国240万人が目撃！生放送の人気番組で起き

たT-ARAの驚愕ハプニング！

発表！ミスFLASH2012 遠野千夏 小松美咲 葉加瀬マイ

FLASH 2月28日号

スクープ！映画『夕闇ダリア』で挑んだエロティックな衝撃濡れ場！ 吉井伶「全裸シーン」

DVDヌード付録岡田潤音

マツダ「デミオ」1台ド〜んと！

ガールズバンド誕生秘話AKB48

ふざけるな！東電超テキトー「値上げ要望書」独占入手 猪瀬直樹・東京都副知事が独占調査した情報を怒りの誌上全公開！

大王製紙「ドラ息子」保釈中でも懲りずに「酒&女漁り」撮った

日ハム大嶋匠“お値段以上打法”を連続写真解析だ

史上最高5億円ジャンボ宝くじ「当せん呼び込む10の秘策」

「農協」というタブーTPPを妨害する悪の巣窟か？食料安全保障の守護神か？

スッパ抜きスクープ 紳助「沖縄・宮古島市長選出馬」仰天計画

「癒し」の表紙&「アダルト」なグラビア安田美沙子

美人料理研究家のBODYレシピ 森崎友紀

FLASH 3月6日号

小野真弓未公開NUDY解禁！

初写真集独占先行公開 松井玲奈

表紙だ！撮り下ろしだ！武井咲

オセロ中島法廷で明かされた「壊れるまでの全発言」
イギリスで150万本バカ売れ！「性教育DVD」凄すぎる中身
官能撮！リリー・フランキー×明日花キララ
中畑VS. 江川 “試合よりも面白かった” 舌戦バトル誌上中継
「押尾学との獄中婚」を報じられた「25歳モデル」
警察官が“犯人”と名指しする暴力団「工藤會」最高幹部が語った 五代目工藤會木村博幹事長インタビュー
「発砲事件数全国ワースト1」福岡県現地ルポ

FLASH 3月13日号

スクープ 小向美奈子ラストSEXDVD付録つき

「首都圏震度7」緊急特集 大地震生死を分ける「30の予兆」！ 深海魚の大量死、地震雲…偶然ではない因果関係を解析する

「震災対策マンション」の実力チェック

表紙！グラビア！ポスターだ！ 松井玲奈

官能の一夜 in 台湾 吉木りさ

オセロ中島 “10カ月ぶりの肉声” 独占スクープ！

AKB48前代未聞！90人90パターン全CM見せます

来日外国人5000人と寝た男 「大陸別」女性をオトす極意

〈デビュー35周年インタビュー〉前田日明リング場外ケンカ王 デビュー前の猪木への金蹴り 武藤との旅館破壊事件

「ダルビッシュ特別扱い」に米国人記者激怒

これさえ読めばOLに自慢できる 「きゃりーぱみゅぱみゅ」15の秘密

まとめ

前章を見てもらうとよくわかりやすいが、今回私が同時期に購入したフライデー、FLASHの2冊とも大きく共通していることは、購読対象者を成人男性に絞っているために、アダルト、アイドルといった性愛を彷彿とさせる記事を多くし、知りたいという人間の根源的欲求を掻き立てている。さらに写真週刊誌ならではの巧妙な手口としてグラビアページを掲載し、袋とじやDVDなどの特典をつけることで、立ち読みだけではみることができない、もしくは立ち読みをさせることでさらに家でじっくり見たいと思わせる「見たい」という第2の欲求を掻き立てる工夫がなされている。読んだだけで分かっただけでなく、見ることに欲求を自然とシフトさせているところが他の雑誌とは大きく違うところである。

次に注目したのは東日本大震災に関連した記事だ。東日本大震災は歴史的にも大きく衝撃的で、原発の事故もあり終息の目途は一向に立つことはなく、いつでもタイムリーな記事に仕上げることができる。そのような観点で見ると編集者側は話題を稼ぐことができ記事にボリュームを出すことができ、新しい話題を探してきたり、捏造したりする必要がなくなるために楽をすることができるようにも感じる。しかし一方で予兆や、首都直下型地震に備えた避難経路をとりあげることで生命維持の手助けをさせるかのような内容に仕上げている。さらに表紙の見出しには掲載されていなかったが、被災地の生々しい傷跡の写真を掲載することで震災の惨劇を1年経っても忘れさせないようにし、同時に生命維持の内容の記事に関心をより持たせようとする意図が垣間見える。

さらにほんの些細なことのように思えるが、2誌とも最後の半ページにはグルメに関する記事を掲載していて、店の紹介とオススメの一品が大きな写真付きで載せられているという共通点も見つけることができた。

以上のように写真週刊誌は人間の三代欲求のうちの性欲と食欲の2つを必ずとりあげ、大半の人間が気にする東日本大震災を中心とした命の危機に関する記事を書き、スキャンダルなど噂話も盛り込むことで、

人間が知りたいと思い、ついつい気になってしまうように構成されている。社会のありとあらゆる場所から多少取材の仕方が問題視されても、話題を引っ張ってくる危ない仕事があるからこそ内容は過激でワクワクさせてくれる。出版部数が減少しつつも継続していきける訳はそこにあると分かった。

ただ、週刊誌を購読していく上で気をつけなければならないことがある。週刊誌で扱われる記事の多くはスポーツ、芸能関係ということなので、スター性や人気といったものに支えられている以上、そのきじにはエンターテインメント性が要求される。エンターテインメントとは余興、娯楽のことであり、取材相手の職業上の実力や業績、成績などももちろん重要だが、それとは別の恋愛問題、夫婦関係、金銭問題などいわば個人のプライバシーに属するものまで取材対象になる。こうした芸能界、スポーツ界での成績などとは直接関係のないスキャンダルめいたものを全面に打ち出し、テレビや週刊誌に売り出す記者の多くが匿名で活躍しているというという制作者側に「匿名」という一種の逃げ道があってこそそのゴシップだということをもまずはじめに念頭に置いておかなければならない。また、週刊誌のようなメディアは駅売店やコンビニ、書店などで即売がされターゲットは会社帰りのサラリーマンであるため、肩の凝らない楽しい記事で販売収入を稼ごうとする以上、記事が「軟派」に傾くのは仕方がないことだということも忘れてはならない。

今私たちを取り巻いている情報は新しいものでなければ情報としての価値が下がってしまうため、滞りないものを前提として発信されている。なので受け手側である私たちが受けた情報の重軽、是非、善悪を判断する能力、さらに自分の判断に基づいて継続的に行動する真面目さを欠いてしまっていたのでは、報道の自由に託された崇高な理想は実現しない。メディア社会の健全な発展には、これらの点も踏まえた読者のメディアリテラシーのための不断の努力が必要不可欠なので、自分の中のメディアリテラシーを育てながら週刊誌を中心としたゴシップと付き合っていきたい。

参考資料一覧

週刊誌

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%80%B1%E5%88%8A%E8%AA%8C>

写真週刊誌

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%86%99%E7%9C%9F%E9%80%B1%E5%88%8A%E8%AA%8C>

フライデー襲撃事件

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%87%E3%83%BC%E8%A5%B2%E6%92%83%E4%BA%8B%E4%BB%B6>

第3章

「報道とマスメディア」各務英明 著 酒井書店

第5章

「うわさとデマ」ロコミの科学 ニコラス・ディフォンツォ 江口泰子=訳

フライデー 2月17日号～3月9日号 講談社

FLASH 2月21日号～3月13日号 光文社